

【研究ノート】

大学における私語問題を考える

The problem of *shigo* in Japanese tertiary institutions

大石 和男

OISHI, Kazuo

要約

近年、大学生の私語（授業を妨げるおしゃべり）は極めて関心の高い問題の一つである。私語に悩まない教員はほとんどいないであろう。特に、教育熱心な教員にとっては大きな問題であるため、我が国のほとんどの大学は私語問題に困惑し何とかこれを解決しようと努めている。私語問題は教員にとって不幸であるとともに、学生にとっても不幸なのである。本論では新堀（1992）の研究を足掛かりに、最近の情報を加えて展開する。

Abstract

Recently, the issue of *shigo* (troublesome chat by students in the classroom) has become of major concern in the tertiary education sector in Japan, with many institutions having initiated steps to tackle and solve the problem. Indeed, there are very few faculty that have yet to come across the phenomenon in their classrooms and it has been established that it causes mental anguish for both teachers and students alike. This article provides recent information about the issue of *shigo*, as established in a former study by Shinbori (1992).

1. はじめに

近年、社会状況の変化とともに教育研究環境も大きく様変わりし、大学が抱える問題も広がりを見せている。以前にはあまり話題にあがらなかったような問題が、教員の間で広く語られるようになった。そのなかでも、大学生の私語は極めて関心の高い問題の一つである。

近年、私語に悩まない教員はほとんどいないであろう。特に教育熱心な教員にとっては、苦痛の種である。彼らは、出来るだけ学生のためになる有難い（と考える）内容を伝えるために、すなわち、学生の幸福を願って講義する。しかし、私語によってその思いは伝わらないことに気づき、ショックを受ける。初めは注意喚起を頻繁に行うであろうが、あまりにもたびたび私語が激しいと教員自身が無力感に陥る。教育の熱意を失い、ひどい場合には教育を放棄するのである。これを新堀¹⁾の言葉で表現すれば、「これだけ有難い話をしているのに、一向にその有難さがわからない、程度の低い聴衆を相手にしなければならない自分がみじめに思われてくる」となる。このような意味で、私語問題は教員にとって不幸である。しかし、実は学生にとっても不幸なのである。

我が国のほとんどの大学は、私語問題に困惑し何とかこれを解決しようと躍起になっている。この様子は、各大学のインターネット上のホームページ（以下、HP とする）を閲覧すれば一目瞭然である。また、世間の関心も高くなっているようである。例えば、2012年11月2日現在、インターネット上でグーグル検索をすると、「私語」だけで678,000件、これに「大学」を加えると573,000件、さらに「迷惑」を加えると235,000件がヒットする。この事実からも、社会における大学生の私語問題への関心の高さが垣間見られる。

これまで大学生の私語を研究テーマにして焦点的に取り上げ、かつ多角的な視点から論じたのは、武庫川女子大教授（当時）の新堀通也が1992年に著した「私語研究序説—現代教育への警鐘—」（玉川大学出版部）が最初である。この研究は、私語の概念や当時の実態、さらには私語が起こる背景や対応など、心理社会的な立場から私語を実に幅広く論じている。この研究が著されたのは20年以上も前のことである。後述するが、この時点ですでに私語が重要な教育問題の一つとして認知されていたことや、当時すでに30年以上も前（すなわち現在の50年以上も前）から私語に悩まされていたというある大学教授の発言の引用もある²⁾。私語問題といえば近年、特にクローズアップされてきたのであるが、実際には古くから存在している。筆を進めるにつれて、改めて私語問題の根深さや根治の困難さを思い、ため息が出たものである。

さて本論は、新堀の研究を足掛かりに最近の情報を加えて展開する。大学における教育問題を根本から考察するにあたっては、必然的に人間の本質的な性向や集団心理などについての分析が欠かせない。教育技術や教員自身の魅力、さらには教員としての資質にまで言及することが求められよう。さらには、大学教員の評価制度や初等中等教育の問題点や国際比較にも触れなければならない。また、各大学の抱える事情は様々であるし、非常勤の兼任講師の問題もある。より基本的な問題である「教員と学生の間個人的、人格的な関係の構築」なども避けては通れない。

本論でそこまで触れることは、紙面の制限ばかりではなく、著者の資質という問題が壁となり到底可能ではない。そこで、本論では近年の大学における私語問題の要点を整理し、その解決のための糸口としたい。

2. 私語の定義と実態

1) 私語の定義

私語の研究には現実的意義と学問的意義があるとされるが、まず直面する問題は、私語の定義、概念規定であろう。それでは、日本の辞書ではどのような定義がなされているのであろうか。広辞苑では、私語を「ささやき。ひそひそ話」、新明解国語辞典では「授業・講演・伝達などが行われている公の場で、それを静に聞くべき聞き手同士が勝手にひそひそ話をする。また、その話」と説明している。

家本³⁾は、「私語」を「おしゃべり」と区別して次のようにとらえている。

「おしゃべり」は「ぺらぺら話すこと・人・様(さま)」という意味で、同じ話すのでも、饒舌で下品で目的性のない傍若無人な声高な雑談のように感じる。「あいつはおしゃべりだ」というと、人格的にも問題があるように見られる。教育現場でも「おしゃべり」はマイナスイメージで使われている。「私語」は「おしゃべり」の下位概念である。(中略) 私語は「ひそひそ話」という意味で「ぺらぺら」に対する「ひそひそ」の「おしゃべり」をいう。「私語」も、むしろ教育現場では「おしゃべり」以上にマイナスイメージでとらえられている。

そのうえで、今日の子どもたちの実態では「ひそひそ話」のはずの私語が、「ぺらぺら」とあたりかまわずのおしゃべりになり、子どもたちの生活空間を支配し、古典的な「私語」の意味は変化していると指摘する。

一方、新堀⁴⁾によれば、私語という言葉は通俗語であり、一般の国語辞典には載ってはいないものの、教育などの専門辞典には独立項目として出てこない。つまり学術用語、研究用語として市民権を得ておらず、その厳密な定義は存在しないし、それに正確に対応する外国語も見当たらないという。そこで新堀は、教員に対して次のような意識調査を実施している。

教員に「私語とは何か」と定義をたずねると、「授業中に生じるすべてのおしゃべり」と最もきびしく、あるいはもっとも広範囲に私語をとらえる人(28%)がいる一方、「授業を妨げるおしゃべり」とする人(35%)がいる。また、内容的に「授業に関連ないおしゃべり」だけを私語とみなす人も34%おり、彼らは私語に対してかなり許容的である。それにもかかわらず、教員の大部分は(85%)はあらゆる私語に対して不快感を抱き、「私語を慎むべきだ」と回答しており、「私語はしてもかまわない」とするものは12%に過ぎなかったという。

私語に対して容認的な態度をとる教員は、私語に悩んだ経験がないほど魅力的な講義をしているか、大人数の講義を持たないために私語に悩まないという推測もできる。あるいは、考えたくないことではあるが、ある意味で教育を放棄している可能性も否定はできない。ちなみに、インターネット上のウィキペディアでは、私語について次のように解説している⁵⁾。現実的な解説なので、あえて引用する。

学校での授業中や職場での勤務中など喋ってはいけない状況でメンバー同士が勝手に会話をするを指すことが多い。近年になってから小学校から大学までの間で増え続けている学級崩壊や授業崩壊となっている教室での授業中は私語で溢れ返っている。私語を行っているのは子供たちだけに留まらず、授業参観では保護者同士が私語を行っている学校さえ存在する。現代では荒れる成人式などと表現されているように成人式会場での新成人のモラル低下が問題となってきており、来賓がスピーチをしている間にも出席者の私語が絶え間なく続いていたという事が毎年のように報道されている。

この内容は、定義というよりも現状の報告といった方が適切かもしれない。本論では、私語に悩む教員の実情に鑑み、「授業を妨げるおしゃべり」と仮に定義しておく。

2) 最近の大学の現状

さて、最近の各大学の私語の現状はどうであろう。いくつかの大学関係者や大学のHP等を閲覧してみることにする。まず、脳科学者で武蔵野学院大学教授の澤口俊之は、最近の自身のブログで「大学の学級崩壊」と題して、以下のような発言をしている⁶⁾。

(前略) 実際の危機は「自発的学習や主体的教育の低下」などの比ではない。一時期話題になった「分数ができない大学生」「平均値が分からない大学生たち」よりももっと危機的である。大学教育の現場は実際問題として準義務教育化しているせいか、義務教育で起きている「学級崩壊」が大学にも現れているからだ。

大学はむしろ義務教育ではなく、学びたい学生だけが進学すればいい。自発的・自主的に学ぶことも本来なら前提である。しかし、実際は、一部の学生がそのような「学ぶ意欲・姿勢」を持っているにすぎず、講義中は私語と携帯の嵐で、煩くてドーニモならない。週刊誌や月刊誌を読んでいる（というかグラビアを見ている）学生の方がまだマシである。

いわゆる必修科目なら「大学内での義務教育」的な要素はあるのでこうしたことは起こり得ることは想定できる。しかし、私の講義は選択科目で、かつ、「この講義で学びたい学生だけ来ればいい」「私語は学びたい学生に迷惑だから私語するなら来なくていい」と言っても無駄である。これではやはり学級崩壊状態と言わざるを得ない。「自発的な学習を促す指導」を教官の間で議論する以前に、「私語と携帯を抑制する方法論」を教官同士で虚しく「議論」

しているほどだ。いくら「自発的な学習を促す指導」をしようとしても、煩くてこちらの声
が通らず、板書しても見ず、質問しても答えず、質問もしてこない……、という学生が多数
を占めていてはドーニモならない。

澤口教授は、このように私語に憤慨する姿を浮き彫りにする。

こうした中、我が国の多くの大学において、授業からの私語追放を呼びかけていることはすで
に述べた。ある大学では特に1年生、2年生の間の講義科目に私語が多いという。その理由には
講義がつまらないことや講義の内容についていけないこともあるが、たいていは学生側の勝手な
思い込みである場合が多いとしている。この大学では、積極的にHPで私語をなくすように呼び
かけている。その理由は、保護者から私語を先生が注意しないことに対するクレームであったと
いう。ただし、学生本人からの訴えではないところが、現代の風潮を物語っているように著者は
感じるのである。

また別のある大学の例を挙げてみる。この大学では、資格取得に関連して全学的に出席制度を
実施しているという。学生に最低限の授業参加を強制しているのである。その結果、学生のアン
ケートの意見として、出席を強制することで、単位を取るためにしかたなく授業に出ている人の
私語がひどく、本気で授業を受けたい人の迷惑だ、などの意見が目立っているらしい。そのうえ
で、授業における私語をなくすためには、教員が学生の関心を惹き付けるような授業内容にする
こと、つまり講義の内容を学生がよく理解できるものにすることが求められると呼びかける。加
えて、教員は私語を追放して教室を静粛に保つべきであることが強調されている。この大学の呼
びかけは、学生に対するメッセージであるように見えるが、対象が教員であるという見方もでき
る。

上に挙げた例は、ごく一部にすぎないが、新聞記事にも私語についての記述が目立つようになって
きた。たとえば、和歌山県の地方紙である紀伊民報の2008年11月11日付コラムでは、関西
でも有数の名門私学が私語で「授業に大きな支障が出ている」という記事を載せた。また、学部
長名による掲示で、「大学生にこのようなことを伝えなければならないことは、慚愧に堪えない」
とまで書かれていたという。この背景には、ゲストスピーカーとして依頼された経済界のキーパー
ソンが、講演中の学生の私語に腹を立て、「その大学の卒業生はもう受け入れない」などの、大
学にとって大きな損失としてクローズアップされたなどの事情があるという。

後述のように、私語は多くの大学で問題視され、学生のマナーの低下とともに急速に広がって
いるようである。大学に限って言えば、その広がりの特徴には短大から4年制大学へ、私立大学
から国公立大学へ、一般の大学から有名大学へという流れがある。

3. 私語の蔓延の歴史とその背景

1) 私語の蔓延の歴史

さて、以上のように近年、急速に蔓延してきた印象のある私語の広がり方はどのような特徴が

あるのでしょうか。また、私語は学生や生徒に特徴的に見られる現象なのであるでしょうか。

家本⁷⁾は、私語をするのは学生や生徒に限ったことではないことを指摘する。たとえば生徒の父母は、入学式などの行事において、また授業参観日やPTAの集まりなどでも私語が多いという。また一般の社会人においても同様で、通常は静粛を求められる音楽会などでもマナーの悪い人が増えており、私語が多くみられるようになったという。さらに、講演会や演説会などでも同様で、用事があれば廊下へ出て話をすればいいのにもかかわらず、周りの迷惑を考えずに私語をすると述べている。

このような事例は、枚挙に暇がない。そればかりか、教員自身の私語についても触れている。家本がある教員の研究会の講演に呼ばれたときのことである。

主催者が開会の言葉を述べている間中、参加した教員はおしゃべりをしていた。久しぶりに顔を合わせたものどうしても多かったのだろうが、それにしてもひどかった。主催者の話など、ほとんどだれも聞いていない。こんななかでどうなるかと思って、話し出すと、さすがに少しおしゃべりがやんだので、すかさず「子どもたちの指導が難しくなった。みなさんと同じように、子どもたちも私語が多い」というと、一同どっと笑って、なんとかおしゃべりがやんだことがあった。

このように、かつて親しかった仲間たちと久しぶりに再会したなどの状況では、たとえ教員とはいえ、私語が発生することもあるということだ。気持ちの高ぶりが状況を冷静に判断する能力を鈍らせているのかもしれない。

さて新堀によれば、かつて小学校や中学校で大きな問題であった私語が急速に大学まで波及してきた現状を次のように指摘する⁸⁾。

かつては昭和40年代初頭には私立の女子短大で一般にみられるものとして問題視され始めていた。この私語が、次第に4年制大学、私立大と国公立大、一般大学と有名大学などの別なく発生しているというのである。しかも、学生の話では、私語は高校よりも大学の方が著しいらしい。また高校以下の段階では、私語とは言わずに「おしゃべり」や「雑談」と称するのがふつうであるし、この段階では学級規模が小さく、生徒と教員の人間関係は密なものであり、教師は「分かる授業」を心がけるといふ事情もある。(中略)

一方、大学では事情が全く異なる。学生に対する教員の統制力や管理体制は一般に極めて弱い。自由や自治の制度、慣行、観念が確立している大学では、それが学生にも適用され、誇り高い大学教員は学生を叱ったり注意したりすることを「大人げない」と考える。学生は身体的にも教員を威圧するに十分だし、即座には返答に窮するほどの口答えをする。まして数百人の学生を相手にする大教室での講義ともなると、教員と学生との間には個人的、人格的な関係など全く欠けている。その上、大学教員は研究者としての意識が強く、よき研究者

イコールよき教育者という古典的な通念に固執しがちであり、ティーチングについては訓練も受けておらず関心も乏しい。それだけに、ほとんど突如として私語という授業妨害にあって、なすすべも知らないという状況に陥る。

また、教育社会学者で上智大学教授（当時）の武内清は、「私語に見る規範意識」と題して次のように述べている⁹⁾。

教室における生徒の私語は昔はほとんどなかったが、ある時期から常態化するようになっていく。小中高の教育現場だけでなく、大学教育の場でも深刻な問題となったのは 1990 年代のはじめである（注）。最近では教室における私語が話題になることは少なくなった。それは私語が消滅したというよりは、私語は日常化して教師も生徒も馴れ、諦めが支配しているからである。私語が授業への集中力を削ぎ、生徒の学習の妨げになることはいつの時代も変わらない。

注) IDE 現代の高等教育 No. 323 1991 年 4 月号 1991.4 教室の「私語」民主教育教会誌民主教育教会誌 0389-0511

このように急速に大学へ広がった私語に対して、一般的な大学教員はどのような反応を示すのであろうか。新堀は次のように指摘する¹⁰⁾。

大学教員は、おそらく学生時代には学問や知識、学習にもともと熱意や情熱をもって生活してきたので、自分の講義を受ける学生も本来そうであろう、あるいはそうあるべきであると考えている。これだけ興味深く、これだけ意味があると信じて疑わない講義内容、知的好奇心をわき立たせるはずだという自信のある授業に対して、学生が私語を以て遇するとき、教員は深い絶望と幻滅を覚えざるを得ない。（中略）。

しかし同時に、聴衆にアピールしない材料を有難がるだろうと錯覚した自分、またアピールする話し方のできない自分が情けなくなってくる。聞き手に対する怒りや不満にもまして、自分自身に対する劣等感や反省が生まれる。早く時間が終わればよい、もう二度とこんな聴衆を相手にしたくないと思う。そうなる話し手からは意欲や活力が失われ、話にますます魅力がなくなり、悪循環的に私語が増え、私語は私語を生み、收拾不可能となる。

以上のように、教員は自分の学生時代にそうであったように、受講生も講義に情熱を持って臨むことに対して「本来そうであろう、そうあるべき」と考える。そして、面白いと信じて疑わない自信のある講義をする。しかし、そこで私語という妨害に会い、学生に腹を立てると同時に自分に対しても腹を立てるが、次第に教育に対する意欲や活力が失われ、教員学生、共に大きな損失を被ることになる。このような図式が見えてくる。

2) 少数の学生による全体への影響

前出の武内清は、少数の学生による全体への影響について、「クラスの雰囲気（風土）と私語」と題して次のように述べている¹¹⁾。

私語に「厳しい」教師のもとでは私語は少なく、私語を注意しない「甘い」教師のもとで私語が多いという、教師による違いは確かにある。しかし、同じ教師でもクラスによって私語の多いクラスと私語のないクラスが生じる場合がある。「授業中私語はしない」という雰囲気がクラスの中にあるクラスと、「私語をするのは当たり前」といった雰囲気がクラスの中にある場合がある。後者では、常にクラス全体が騒がしく教師の叱責はほとんど効をなさない。筆者は、昨年一人の高校教師の2つの授業を見学した。一つのクラスは1年生の世界史の授業で、教師の話をノートを取りながら静かに聞いている生徒が大部分であった。私語は皆無に等しい。もう一つは3年の政治経済の授業で、学校中で一番騒がしいという評判のクラスであった。確かに騒がしく、教師の声が教室の後ろまで届かない。特に、窓側で前から3列と4列目の4人の女子生徒が机と椅子を寄せ合い、休み時間と変わらない態度で、大声でしゃべり、笑い声を上げている。その「おしゃべり4人組」がクラス全体の雰囲気を作っている。彼女らにとって教室と喫茶店の区別はないに等しく、「授業中の私語は悪い」という意識は皆無のように見受けられた。それがクラスの全体の雰囲気をつくり、クラス全体がざわついている。教師は再三その生徒たちを叱責し指名し、注意を授業内容に向けさせようとするが、短時間その生徒たちの関心を引き付けることができても長続きせず、すぐ元の状態に戻る。教室がざわついていると他の生徒も授業への集中力が欠け、自然におしゃべりが蔓延する。私語をしたくない生徒でも、友だちから話しかけられてそれを断れる勇気がある生徒は数少ない。このように私語の有無は、クラスの雰囲気に左右される部分がかなり大きい。

このように、少人数がクラス全体の雰囲気を大きく左右するという現象は、多くの教員が経験しているであろう。逆に、何らかの方策でこのような特定の学生をコントロールして私語を防止し、よい雰囲気の授業運営が可能となるかもしれない。

3) 私語の背景にある事情

一般に指摘されていることではあるが、私語の原因は学生側と教員側の双方にある。それと同時に、各大学の事情に伴って運営されるシステムに起因するものもある。

学生側の問題としての私語

私語する学生側の問題点として、新堀は次のようないくつかの点を挙げている¹⁾。すなわち、日本人の公私感覚としてのけじめや上下関係の消滅、私的行動としてのテレビ視聴の構図の持ち

込み、大学入学以前に「子ども天国」のあつかいを受け許容されることに慣れていること、マジメに対する冷笑的態度や反マジメの風潮、学生の大衆化、不本意就学・不本意在学・不本意出席などである。

「公私のけじめの消失」、テレビをしゃべりながら見ても出演者に失礼にならないという「私的行動等の授業への持ち込み」、それに「子ども天国」への慣れについては、今日においても指摘の通りであろう。「学生の大衆化」に関して述べると、文部科学省の発表した 2012 年度「学校基本調査」の速報結果によれば、2012 年 8 月時点で高校卒業者の 54% が大学進学であったという。このような背景を考慮すれば、大学で講義を聴いて理解できる、あるいは理解しようという意欲の高い学生ばかりではないことが推測できる。むしろ、目的意識も持たずにとりあえず大学を卒業しようとする学生は決して少なくないであろう。このような学生が、講義中に私語に夢中になるであろうことは容易に想像ができる。

また「マジメに対する冷笑的態度や反マジメの風潮」に関して言えば、近年の社会的な経済事情を背景に、最近の学生は大学を休まずに授業には出席する傾向にあり、資格や技術を身につけたいと考える学生が多いことが私学大学連盟の調査からも明らかである。このように真面目な学生が多数を占める現状を考慮すれば、一部の例外を除いて「冷笑的態度や反マジメの風潮」が私語の蔓延に貢献するという指摘は、現在では当てはまらないかもしれない。

さらに「不本意就学」等に関して言えば、詳細なデータを持ち合わせてはいないものの、この点に関して筆者が依頼された学生相談の件数には大きな変化がない。昔から少なくないのである。したがって、急激な私語の蔓延を説明する理由にはなりにくいものと考えられる。ただし「不本意出席」について言えば、新堀の指摘の通りであると考えられる。興味のない授業に集中して聴くということは、まず考えられない。なんとか単位を取得できる程度に授業に参加してはみるが、寝てしまうか私語に向かうかのどちらかであろう。

不自然な授業形態

高校生にとって、数百人規模の講義を受けることはまずない。それが、大学に入学したとたんに急にやってくるのである。しかもそれまでの 50 分間ではなく、その 2 倍近い 90 分間の講義である。加えて通常は、一方的に話を聴くだけなのであり、この事態に適応できる学生は決して多くはないのではないだろうか。この講義形態について、前出の武内清は「不自然な授業形態」と題して次のように述べている¹¹⁾。

「人は常に人と会話をしている。先生との対話なしに一方的に講義を聞くのは異常な状態で大変な苦痛である」「多数の人間に対してひとりの人間がしゃべるのだから一方通行にならざるを得ない。人間の集中力なんて限られたものだ。仕方がないと思う」という大学生のコメントがあった。現在の教室の授業にもともと制度的な無理があるとも考えられる。ひとりの話を一方的に長時間聞かされるということは日常生活ではほとんどない。その異常な状

態への適応行動が私語とも考えられる。ひとりひとりの個に応じた教育がなされれば、相談したり、聞いたりする会話が合ったにしても、それは授業を妨害する私語にはならないであろう。「私語をしない人は、内職をしているか、眠っているか生徒が多く、講義を最初から最後まで聞いている人は少ない」授業中の居眠りや携帯でのメールのやり取りは、私語と違って周りに迷惑をかけることが少ない。しかし、教師の話に対して、皆眠っている教室、皆携帯を取り出しその画面を見つめ、あるいはメールを交換している光景を想像してはどうだろうか。私語がなく、教室は静かだが、授業は成功しているとはいえない。

教職教育の不在

高校以下の初等中等教育の段階では、すべての教員は教員免許を有しており、大学の教員とは異なる。そのうえ、大学教員の採用、昇進などの評価基準となるのはおおそ研究能力で、それを客観的に示す資料としての学歴、研究業績、学位、賞などである。それに対して、教育にかかる情熱や技術、あるいはそれらの表現としての授業準備など教育へかける時間などは評価の対象にはならないのが普通である。新堀は、この点について次のように指摘する¹²⁾。

大学の教員は教職教育も教育実習も受けておらず、大学院時代、教育より研究への関心を育てられていた研究者が重視するのは研究者が構成する学界である。学界（より具体的には学会）の構成メンバーは全世界、少なくとも全国的に散在する研究者であり、彼らの準拠集団、所属集団はローカルではなくコスモポリタンである。この学界での人気、威信、地位などを決定するのは、同じ専門研究者あるいは学者仲間である。学問熱心、研究熱心な大学教授ほど、教育を軽視し、よき研究者イコールよき教育者という古典的な考えを信じる傾向にある。

このような状況は近年改善傾向にあると考えられるが、頭から否定する自信もない。ただし、教育と研究とは両立しない対立概念であるという考えには異論もあるという¹⁴⁾。

大学教員は大学という教育機関に採用され、勤務しているのだから、教育は彼らの主要な義務であり公務でもある。教育効果を上げればよい学生が集まり、よい卒業生を送り出すから、それが勤務大学の人気や社会的評価を高め、その結果、そこに勤務する教員の研究条件や社会的、学界内の地位を高めることになる。

大学が拡張し進学率が高まるにつれて、大学は研究機関というより教育機関としての役割や期待を大きくするようになるし、「冬の時代」を迎えて、ますます学生や世間の意向に敏感になる。いかに研究熱心な教員といえども、学界にだけ目を向けているわけにはいかないのである。

以上のような社会背景もあり、文部科学省は各大学に積極的なFD活動を求めている。その中

心となるのが、学生による授業評価である。これらの点についても述べていきたい。

教育活動をどう評価するか

上述の問題の背景には、教育に熱心な教員が正当に評価されない事情があるものと考えられる。教育には手間暇、時間、それにも増して熱意が欠かせない。この点に関しては、諸外国のシステムに学ぶところも大きいと思われる。たとえば、教育に特化した教員と研究に特化したそれぞれの教員を分けて採用している大学も少なくない。前者は教育の効果で評価され、後者は研究の内容や質、それに獲得した外部資金の額の総額などで評価される。実際、次に挙げるようにビジネス最前線で活躍する方の意見もある¹³⁾。

大学に対して産業界から人材育成、研究の両面で改革を求める声が強まっている。そのなかで、学生ベンチャーの草分けといえる堀場製作所の堀場雅夫最高顧問は「教員、学生ともに従来の大学の権威に安住できない時代が来た」と指摘する。出身の京都大学で経営協議会委員を務める経験も踏まえ、改革策を語ってもらった。(中略)

〈記者〉大学教授には研究と教育のふたつの役割がありますが、両者はどうあるべきですか。

「一流の大学は一流の研究者、教育者の両方が必要だが、一人の人間がそれを両立させるのはむずかしい。私は京大で物理学を学んだが、そのころ、のちにノーベル賞を受賞する湯川秀樹教授も教えていた。湯川教授の授業は難しい話を黒板に書き並べるだけでちっともわからない。文句をいいにゆくと、『わからないやつは聞かなくていい』という始末。あまりにひどいので、授業を学生全員でボイコットしたことがあった。それから多少改善したが、世界トップ級の研究者だからといって、優れた教育者にはなれないことを証明している。いまは教授というひとつの名称しかないが『教育教授』と『研究教授』に分けるべきだろう。湯川教授は教えるよりも研究に打ちこみたかったのだ」。

〈記者〉そうすると多くの人は「研究教授」になりたがりませんか。

「それこそ大学に残る権威主義だ。教養課程の教授より専門課程や大学院の教授のほうが上といった勘違いがある。学生に興味をもたせ、知的好奇心をかき立てる授業は人の人生を左右する重要なものだ。私が物理を学ぶきっかけは高校の先生の授業だった。いまの日本では勉強は大学入学の道具でしかなく、真の知的好奇心を持っている学生は少ない。その意味では大学を活性化するには小学校、中学校、高校の先生の努力が必要だ」。

このように堀場氏は述べており、研究に偏重した現在の大学の評価システムを変え、教育もより重視すべきであると述べている。それでは、教育研究活動を指導する文部科学省では、教員の評価方法についてどのような見解を持つのであろうか。文部科学省では、「教員評価システムの取組状況について」と題して次のような見解を示している¹⁴⁾。

将来の日本を支える人材を育てるため、教員の資質の向上や数を充実することなどにより、質の高い教育を実現することは極めて重要な課題であり、そのような中で、教員の資質を向上させ、学校教育に対する信頼を確保するために、教員評価により、教員が自らその教育活動を見直し、自発的に改善していくとともに、教員の能力と業績を適正に評価し、意欲と自信を持たせ、また、教員の指導力や勤務実績が処遇上も報われるようにしていくことが必要である。

しかしながら、以上の見解を述べた対象が初等中等教育の教員にとどまっており、実際には大学の教員にまでは及んでいない。上述のように、文部科学省は大学に対して自己点検やFD活動の強化を求め、学生による授業評価や研究活動に対する評価を実施することを指導している。しかし実際には、学生からの授業評価をどのように組織の中での教員の評価へつなげるか、処遇上も報われるシステムを構築するか、については積極的ではない印象を受ける。

4. 学生自身が考える私語

それでは、講義を受ける立場にある学生自身は、私語をどのように考えているのであろうか。大学のHPやインターネット上での教員の発言、それに筆者が個人的に行った本学学生への聞き取り調査の結果からは、学生自身も大変に迷惑をしているというのが実態である。当たり前のことであるが、熱心に講義に参加しようとする学生ほど不利益を感じているようである。

谷山・武村が実施したアンケートによれば、学生の意見として以下のようなものが挙げられている¹⁵⁾。

「私語をした人の席の移動を行ってほしい」「毎回、私語の多い人の名前のアンケートをとり、その人へ注意を促す」という提案がある一方で、「私語と隣人との相談（聞き逃した言葉や文字、講義に関係のある会話）との区別がつきにくい」ことや、「席を移動することによって講義時間を奪われて、進行の妨げになる」「席を移動してもそこでまた私語が始まる」、あるいは「勉強をしたい人が前席にいるのだから、前席にこられると迷惑」などの意見もあった。また、「私語をする人はほっておけばよい」という容認的態度に対して、「私語をする人は退学、受講させない」などの厳しい意見がある一方で、「たまに学生が講義する」や「会話をしていても良い時間を講義中に設ける」などの建設的意見もあった。

しかしながら、「私語をするが成績は良い」という事例についても紹介する。31年間新聞記者を務めたのち、大学の教員へ転じ「マスコミュニケーション論」を担当することになった、武蔵野女子大学教授（当時）の前田利郎の話である¹⁶⁾。

大いにとまどったことが二つある。一つは、授業の最中に私語が絶えないことである。も

う一つは、私があれば情熱をかけて制作に参加してきた新聞を、世間の人たち、特に若い人たちがあまり読まないということである。(中略)

教室の真ん中あたりで、いつも左右の学生としゃべり続けている学生がいた。そんな学生をこらしめるために、期末テストのとき、講義を聞いていないと答えられないような問題をいくつか出した。ところが、その学生の答えはすばらしくよく出来ていた。不思議なので、その後、キャンパスで出会った彼女に「あなたはいつもおしゃべりをしているわりに、テストはいい成績をとりますね」と聞いてみた。返ってきた言葉は、「先生、私はおしゃべりをしながら講義をしっかり聞いているんです」。

テレビをつけ、ラジオの音楽を聞きながら勉強をする、今の学生たちならではの答えか。

いくつかの事柄を並行して行うことが可能な学生にとっては、私語をしながらも講義の内容は思いのほか頭に入っているということなのかもしれない。このような事例は少数ではあろうが、筆者は、その一部は説明ができるのではないかという印象を持つ。詳述は避けるが、たとえそれが無意識的なものであろうと、このような私語は授業が面白くない、あるいは興味が持てないこと、あるいは拘束されることなどに対する教員への直接的な攻撃行動か、あるいは何らかの批判的なメッセージであるとも解釈できるのではないだろうか。

さて、以上のようにほとんどの学生は私語に対して非容認的である。またやや容認的な学生の意見はあるものの、「学生の不利益」という視点からは、当然のことながら教員は私語を容認すべきではないであろう。

5. 解決へ向けた取り組み

1) 私語に関する経験則

大阪大学教授の池田光穂は、私語事象が生起する際にみられる経験則について次のように述べている¹⁷⁾。

まず、私語を止めさせる究極の方法は存在しない。しかし、未然に私語を防いだり、私語が発生しても抑制させる様々な方法が経験的に伝えられている。私語対策のノウハウには、その教師の授業や学生に対する考え方やイデオロギーが色濃く反映されている。そして、公共圏におけるルールや教育の権利意識を認識させることが根本的と考える教員が多いが、しかし他方で、それらの教員は授業でその理念を具現化させることは難しいと考えている。

そして、次のようなことをシラバスに明記し、授業の第一回のはじめにも繰り返して口頭で宣言するという¹⁷⁾。

1. 大学の授業は出席することが当たり前であるので、出席確認はとらない。

2. 私語や居眠りは、他の学生に心理的なさまたげとなるのでこれを厳禁する。
3. 私語や気分転換が必要になった学生は、自由に退席してもよい。ただし、他の学生に迷惑にならないように。
4. 授業を受けることは学生の権利である。それを保障するための助力は惜しまない。

そのうえで、私語が起きた際の対応方法について次のように述べている。

1. 当該学生を見据え、それが無理な場合は、会話を中断する。(ただし多数の私語には対応できない)
2. それでも止まない場合は、当該学生を口頭で注意する。その際には、怒りをなるべく抑え、なぜ話したかったら退席するなり、質問するなりしなかったのかについて聞く。
3. 授業の始めに宣言したことを学生に確認させる。応じない場合は、1. で明示した契約の概念に違反していることを再三にわたって確認させる。権利・義務・契約の概念について論争できるだけの知識をもっているはずなので、当該学生を徹底的に論破することは、それほど難しくない。

以上、池田教授のご意見を引用させていただいたが、この中のいくつかの方法を実践されている教員も少なくないであろう。教育心理学の分野では、教育効果を高めるためにはクラスにおける「ルール」と「リレーション」が重要な要素になると考えられている。特に「ルール」は最も基礎になるもので、これを抜きに教育は成立しないといわれるほどである。したがって、私語の問題を解決するには、教員が私語を認めないことを表明し、その覚悟も示し続けることが重要になろう。

2) 各大学の私語抑制の試み

本稿では私語が各大学において問題視されている現状をみてきたが、私語を抑制するために各大学では実際にどのような取り組みが実際になされているのだろうか。日本の大学で実施されている私語抑制の試みの主なものを、HP 等から抽出してみた。

- ・HP や広報誌で、私語をしないように呼びかける
- ・講義系の主な科目で、座席指定を義務付ける
- ・ゲーム機を授業に導入し、興味を引き付ける
- ・大人数の講義で出欠をとったり、注意を促したりするアシスタントをつける
- ・講義の初回に私語に対する姿勢を明確に示す
- ・学生の顔と名前を一致させて関係性を構築する
- ・ルールの周知「私語すれば、まずは減点、つき除名」と黒板に大書する
- ・ルールの実行 学生証(免許証、会員カード…)を提示させて学籍番号と名前を記録する

- ・途中 10 分間を「ハーフタイム」として、質問や自習時間を設ける
- ・教員としての礼儀や師弟関係を明確にする
- ・ルールを作り、守らせる
- ・生徒とのコミュニケーションを大切にする

なお、ゲーム機の導入例は理工学系の大学における特殊な事例である。ざっと見渡せば、「ルール」を徹底することについての呼びかけが目立ったことや、座席指定などは誰が私語をしているか即座に分かることになり、即効性あるいは経済性という点で有効であろう方策もみられた。もちろん、親しい友人と離れて着席せざるを得ない点や周囲の学生が固定される点はデメリットであろうが、逆に新しい友人を得る機会となるかもしれない。

3) 学生の自主性の問題と魅力ある授業のために

さて以上のように、HP からは様々な意見が得られたが、筆者が気になった点がある。それは、学生自身も私語に困惑する様子がかがわれたものの、学生が自ら注意し合うなどの自主性を喚起する取り組みがほとんどない点である。繰り返すが、私語に迷惑しているのは教員だけではなく、真剣に学ぼうとするほとんどの学生なのである。とはいえ、学生自身の立場も理解できないわけではない。事はそれ程簡単ではないからである。保身術としての「事なかれ主義」の風潮は深刻である。初等中等教育時代に受けた「いじめ」の体験、あるいはそれを見てきた体験は、目立つことを避け、大衆の一人に埋没することで自らを防衛することを学ばせるのである。筆者が学生の立場であったらどうであろうかと思うとき、私語を自主的に注意し合わない現代の学生を頭から否定できなくなるのである。

次に、「魅力ある授業」を考えてみたい。講義に魅力を感じれば、学生は私語をせずに講義に意識を集中するであろう。また教員と学生が常にコミュニケーションをとれる緊張感のある講義であれば、私語の入り込む余地はなくなるであろう。少人数のゼミナールで、私語に悩む教員はほぼ皆無ではないか。その意味でも、大人数の講義は難しい。そのような場で、すべての学生とコミュニケーションをとることは至難の業である。そのためにも、言うまでもないが教員は普段から学生とのコミュニケーションをとることを心がけ、信頼関係を築いておくことが求められるであろう。

6. 最後に

本稿の推敲にあたってインターネット検索をしている際に、現代の私語問題の背景には著しい情報化社会の普及があるのではないかという考えが頭をよぎった。知識がインターネットを用いることでどんどんと集まるのである。筆者のゼミナールでは、4 年生以上の学生の多くはパソコンを持参している。理解できない言葉や事象をインターネットで検索しながら、リアルタイムに討論に参加しているという現状がある。筆者自身も、講義中に授業補助の学生に検索をお願いす

ることもある。その是非はさておき、学生にとっては講義よりもインターネットから学ぶ機会が圧倒的に増えていると思われる。そう考えれば、多くの講義ではキーワードだけを記憶または記録し、それらを試験前にインターネットで調べておけば最低限の単位は取得できるかもしれない。このような背景が、講義の時間を社交の場とする一因ではないか。このような考えである。

小柳¹⁸⁾が指摘するように、以前、知的情報の提供の場は主に大学だったはずである。ところがインターネットの急速な普及に伴い、ほぼ独占状態であった知的情報の場は大学からそちらに移りつつある。このような社会的な変革が、より一層私語の蔓延に拍車をかけているのではないだろうか。現代における私語問題は、私たち教員にどのような意識の変革を迫るのだろうか。そのような複雑な思いを抱きながら筆をおく次第である。

参考文献

- 1) 新堀通也: 私語研究序説—現代教育への警鐘—, p8, 玉川大学出版部, 1992.
- 2) 文献 1, 同掲書 p37
- 3) 家本芳郎: 私語・おしゃべりの教育学—私語は指導の出発点—, 学事出版, p21, 1997.
- 4) 文献 1, 同掲書 p36-37
- 5) ウィキペディア: <http://ja.wikipedia.org/wiki/%E7%A7%81%E8%AA%9E> (2012年11月10日最終アクセス)
- 6) 澤口俊之: 大学の学級崩壊. <http://toshi-sawaguchi.life.coocan.jp/blog/2012/05/120507.html> (2012年11月1日最終アクセス)
- 7) 文献 3, 同掲書 p19
- 8) 文献 1, 同掲書 p7-8
- 9) 武内 清: 私語に見る規範意識. <http://pweb.sophia.ac.jp/k-takeut/text/2002523b.htm> (2012年11月1日最終アクセス)
- 10) 文献 1, 同掲書 p8-9
- 11) 武内 清: クラスの雰囲気(風土)と私語. <http://item.rakuten.co.jp/sakaiya/c/0000002888/> (2012年12月10日最終アクセス)
- 12) 文献 1, 同掲書 p19
- 13) 日本経済新聞: 大学, 2012年7月26日朝刊.
- 14) 文部科学省: 教員評価システムの取組状況について. http://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/22/10/attach/1298542.htm (2012年12月10日最終アクセス)
- 15) 谷山鉄郎, 武村 泉: 私語のない授業への試み. http://ir.bliss.chubu.ac.jp/cgi-bin/retrieve/sr_bookview.cgi/U_CHARSET=utf-8/XC10109040/Body/203_Taniyama.html?CGILANG=english (2012年12月10日最終アクセス)
- 16) 文献 1, 同掲書 p4-5
- 17) 池田光穂: 大学授業・私語プロファイリング. <http://www.cscd.osaka-u.ac.jp/user/rosaldo/991111AC09.html#4.5>. (2012年12月10日最終アクセス)
- 18) 小柳晴生: 「立ちどまる空間・自分とつきあう時間」としての学生相談—カウンセリングが必要とされる時代背景(特集・学生相談—こころの成長支援). 大学と学生 (28), 7-13, 2006.